42 期生

⑤知的障害者の心理

課題：行動観察法や心理評価を用いたアセスメントについてまとめ、アセスメントをすることの重要性についてあなたの体験をふまえ具体的に述べなさい。

アセスメントについては「②知的障害者援助」の中でその重要性を学んだ。障害を持つ人の生活状況、生活上の問題やニーズを詳細に把握し、問題解決や改善に向け支援、支援の方法を模索するために本人や本人を取り巻く状況を総合的に分析し、具体的な援助へ結びつけることがアセスメントの意義と考える。そのためにまず、本人を（本人を取り巻く環境を含めて）理解することが重要である。知的障害者の場合、言葉や文字でのコミュニケーション能力が不十分であったり、自分が考え発言し、行動するための支援を受けずパターナリズムの生活を送ることが長かったりすることから、本人を理解する方法として心理テストや面接だけではなく、本人の行動を観察することで理解を深めることが求められる。

行動観察法；

本人の行動を直接かつ客観的に観察し記録することで、行動の特徴、性格の特徴や心理的状況といった内面性を判断し、本人を理解しようとする方法である。観察の方法として、日常生活の中で自然な場面を選んで行う自然観察法と、人為的な条件の中で結果を求める実験的観察法がある。どちらについても観察の正確さや複数の観察者の評価や評定が一致していることが求められる。また観察に際しては目的を明確にすること、一つの行動も他の条件との相互関係でとらえること、客観的な観察態度として正確な記録が必要である。

心理評価法；

心理評価は療育指導の対象となる人の望ましい成長や発達をめざし、その人についての理解を深めたり、療育の結果を判定するためにおこなわれる。すべての心理評価の基礎になるのが観察法である。知的障害の人たちへの心理検査は完全に行うことが難しく観察で補うことが多い。標準テストによる検査法では①発達の評価、②知的能力の評価、③性格の評価を目的としたものがある。いずれの検査も、専門の訓練を受けた熟練した人によって行われるものであり、得られた結果はあくまでもその人の一側面を表しているにすぎないことを忘れてはいけない。また知的障害の人たちは、問題の趣旨がうまく伝わらなかったり、理解できても要領を得た回答ができないなど、完全な検査結果を期待することは難しい。

アセスメントは支援者が一方的に障害者の抱えている課題や困難なことを把握し分析し支援に繋げるものではないと思う。自身の生活の困難を意識していない人もおり、支援者からの働きかけや情報の提供により、本人にとっても自分の自分の生活の現実を見直し、自身で仮題を見つけ、生活を変えようとするきっかけにもなりう

PURC Site

る。私たちは知的障害特有の「認知が不正確だったり、複数のことを比較したり選択することが苦手だったり、先のことを予測したり、見通しを立てることが難しい」など機能的な障害だけではなく、経験が不足していることから依存的で自己決定するより、周囲の意見を受け入れることが当たり前になっている人が多いように思う。

私の勤務するCHを利用するWは27歳。一般就労している中度の障害を持つ青年である。水産関係の仕事をしているWが雇用を継続するための支援方法を話しあった。課題として

①繁忙期で始業時刻が変わると送迎バスに間に合わない

②決められた作業をこなすことで満足し意欲的に見られない

③休憩時間に他の従業員の飲み物を飲んでしまう

ことがあるなどが挙げられた。Wは数字や時刻を理解し、一定の金銭も自分で所持し電卓での計算もできている。生活担当および就労担当の支援者が本人と課題を克服するための話し合いを進めるうち、時計は理解しているが、職場で告げられた送迎バスの時刻をCHを出発する時刻と思い込んでいることが分かった。また、働くことはいとわないが、頑張ることが給料UPに繋がる意識がなかった。小遣いの使い方も計画性や優先順位をつけられず、一度同僚が飲み物をおごってくれたことが「人のものを飲む」行為に繋がっていた。将来の見通しをどれくらい持てるのかアセスメントした結果、職場へ持っていく飲み物代は世話人から毎日渡す、その際「今日全部使っていいお金だよ」と言葉をかける。給料で買いたい物、したいことについては、季節に沿って考えてもらい、支援者が予想もしなかった服飾に関する興味を本人から聞くことができた。私たちは飲み物代は日単位で、買い物は季節単位でと、Wの理解力のアンバランスさを改めて知ることができた。アセスメントにより過去の経験による支援者の予測の不確かさに気付き、本人も自分の要求や課題に向き合うことができたように思える。アセスメントとは支援方法の基礎となるばかりではなく、本人と支援者が新たなニーズと課題に気付くきっかけになることを学ぶことができた。

講評：

アセスメントについて、非常に簡潔にまとめられました。また、利用者さんを取り巻く複数の方の話し合いによって、多角的なアセスメントを実現され、単なる「周囲の困り感」ではなく「ご本や職場の抱えるニーズ」を発見し、適切な支援につなげる過程が示された、優れたレポートです。